

## 【ずすいさま】

「う、うわー！ 助けてくれー!!」

「んふふ♪ 貴方、私の「ご飯」♪」

ある寒村の男は、冬の蓄えが心許無いからと、森に木の実を採る為に足を踏み入れました。

しかし、森は危険な動物や妖女の領域です。案の定、男は「ずすいさま」と呼ばれる妖女に捕まってしまいました。

『ずすいさま』は男の村では恐れられている妖女です。

『ずすい』とは、漢字で表すと『頭吸い』となります。つまり捕まえた獲物の脳髓を吸い取って殺してしまうという恐ろしい妖女なのです。



「んふふ♪ ほら、食べちゃうよ、食べちゃうの」

「あ、あ、やめ、やめろ！ やめろー!!」

「いま、歯でおじさんの頭、穴開けているから、大丈夫、痛くはない、痛くないでしょ?」

「だ、誰か助けてくれー!! お願いだ! 誰かー!!」

「ほら、もうすぐ、穴開く、おじさんの頭に穴開く、そしたらじゅるじゅる吸うの♡」

「や、やめろ!」

「脳みそ、私に吸われるの、とっても気持ちいい♡ 気持ち良く、吸ってあげる♡」

「あああー!!」



「ん♡」

「はうん!!」

「ほら、穴開いた。おじさんの脳みそ、美味しい♡」

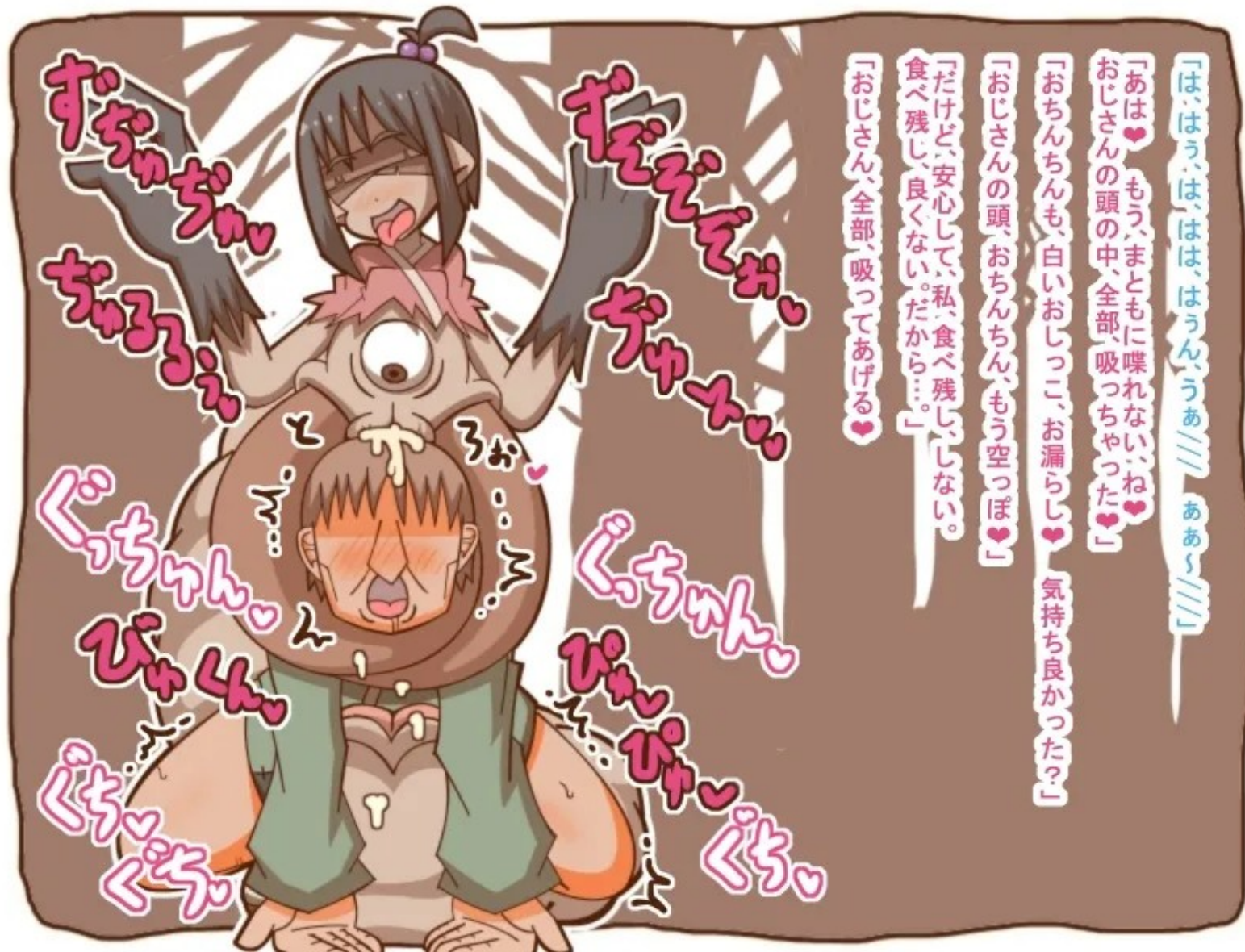
「は、はあああああ!!」

「ほら、とっても気持ちいいでしょ? 私に吸われると、みんな気持ち良くなる♡」

「あ、ああ、あう、うう……!!!」

「気持ち良くて、おちんちん硬くする♡ おちんちんも、気持ち良くしてあげる♡ 皆硬くする♡」





「は、はう、は、はは、はうん、うあ〜 ああ〜」

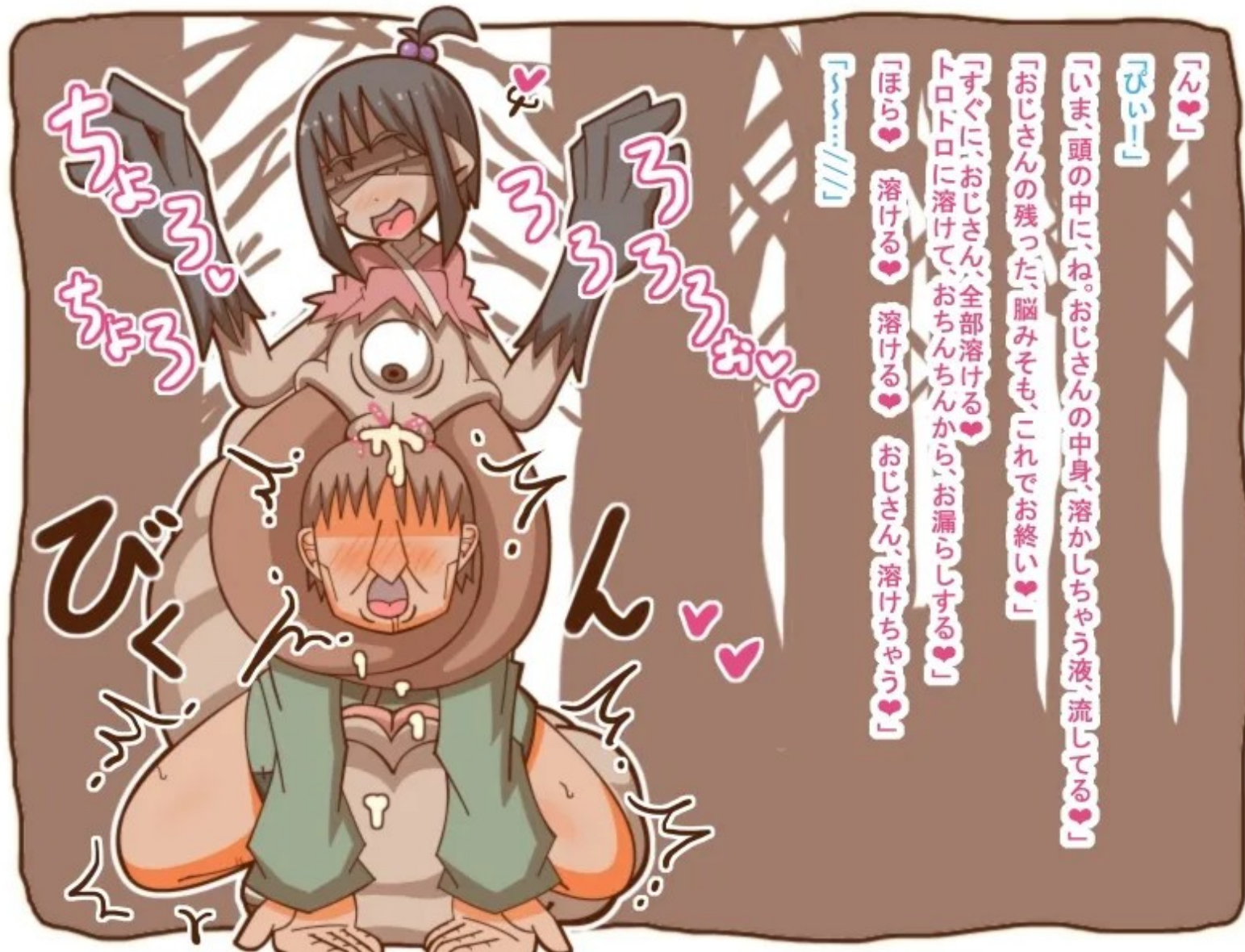
「あは♥ もう、まともに喋れない、ね  
おじさんの頭の中、全部、吸っちゃった♥」

「おちんちんも、白いおしっこ、お漏らし♥ 気持ち良かった？」

「おじさんの頭、おちんちん、もう空っぽ♥」

「だけど、安心して、私、食べ残し、しない。  
食べ残し、良くない。だから…。」

「おじさん、全部、吸ってあげる♥」



「ん♡」

「ぴいー!」

「いま、頭の中に、ね。おじさんの中身、溶かしちやう液、流してる♡」

「おじさんの残った、脳みそも、これでお終い♡」

「すぐに、おじさん、全部溶ける♡」

「トロトロに溶けて、おちんちんから、お漏らしする♡」

「ほら♡ 溶ける♡ 溶ける♡ おじさん、溶けちやう♡」

「〜…!!!」

ちやう♡  
ちやう♡

♡  
ろろろ♡  
ろろろ♡  
ろろろ♡  
お♡♡

びん♡  
ん♡  
びん♡  
ん♡



「あ…出た♥」

「…」

「おじさんの、おちんちんから、溶けた、おじさんの中身、出た♥」

「おじさん、美味じい♥ おちんちんから、おじさんの、全部、出てる♥」

「どびゅどびゅ、って、お漏らし、してる♥」

「最後に、お漏らし♥  
とっても気持ち良い、お漏らし、出来て、良かったね♥」

「じゃあ、全部、吸って、あげる、ね♥」



「おじさん、美味しい♡  
全部、吸ってあげる♡」  
とっても、美味しい♡

「食べ残し、良くない。おじさん、私の中に、来て。  
おじさんの、全部、私に、吸わせて♡」

「美味しい♡ 美味しい♡」

「おじさん、ご馳走様、でした♡」

男を吸い尽くした『ずすいさま』は、腹も膨れてご満喫です。

こうして男は、冬を越すどころか、その前に『ずすいさま』に捕まって、頭に穴を開けられて、おちんちんを弄られながら脳みそをじゅるじゅる吸われて、最後は吸われて空っぽになった頭の中に消化液を流し込まれて、おちんちんから全て吸い尽くされて死んでしまいました。





### 【赤百草】

ある林でちゅぽちゅぽというくぐもった水音が響いていました。

「お、おお〓〓 いいいよ〓〓 今日もいっぱいボクのザーメンを御馳走してあげるからね♡」



その正体は太った男の股間に顔を埋めて、女の子が口で扱っている濡れ場の音でした。

ですがその女の子は人ではなく、『赤百草』という妖女です。

「出、出る〓〓〓 出る出る〓〓〓」

「うっ／＼ あ、ああ、気持ち良い／＼  
今日も残さず飲んでね♡」

『赤百草』は、ほとんど大人しく、受け身の妖女です。  
興奮作用がある花の香りで男を引き寄せはしますが、  
自分から襲う事は無く。



艶めかしく開いている口に、男が自らちんこを啜えさせて  
性処理として使われるのを、受け入れている妖女です。  
事後も拘束される事も無く、危険も無く、  
ただ気持ち良い事が出来ると男を安心させるのです。

何回も、何十回も、そして百回も超えると、『赤百草』は安心させて、油断させた男をとうとう捕食する動きに出ます。  
その妖女の名称に“百”の数字が入っているのは、その為です。



翌日、しかし、やっぱり人を喰らう妖女である事には変わりなく。  
「お、おおっ!!! 今日はやけに積極的だね♡し、舌が入って来るっ♡」



「お、おおお!!  
な、何かちんこに流し込まれ...て!!  
あ、ああ...!!!」

いま、太った男の尿道に  
流し込まれているのは、強い快楽を伴う  
強力な消化液です。

ガク



「あ、熱い!! 体が熱い!! ちんちんもすごいジンジンして...!!!」

タガメや蜘蛛と同じように、『赤百草』も舌の先端から  
この消化液を男性の性器から流し込む事によって、男性の体内を  
溶かしているのです。

「あひいひい——♡♡♡」

『赤百草』が尿道から舌を抜くと、太った男の体液が  
ちんこから勢いよく噴き出してきました。

あまりの勢いで体液が出てくるものだから、



飲み切れずに、『赤百草』の口から漏れ出てしまいます。

男はあまりの快感でとても立っていられません。  
そしてそのまま——。

後ろにひしゃげて倒れてしまいます。

「だ、だ！」 おお…♡♡♡

ですが『赤百草』はちんこから手を離さず、吸い付いて放しません。

中途半端な宙づりになった男はそのままどんどんひしゃげていきます。

くたぁ…



「……」

もう、そこには太った男の姿はありません。

あるのはあまりにも変わり果てた、皮を残して全て『赤百草』のお口に全てを吸い尽くされた、太った男だった残骸です。

もう皮だけしかないのですが、それでも『赤百草』は貪欲に、吸い付きます。  
下品な音が林に響き渡ります。



とうとう皮すら『赤百草』によって  
吸い尽くされてしまいました。

後に残されたのは、太った男が着ていた衣服と、  
『赤百草』の口から垂れている太った男だった体液だけでした。



END

### 【兔悪魔】

「あゝ 美味しそうな男の子だ♡♡」

「ひっ！」

隣村に行く途中で運悪く男の子は「兔悪魔」という妖女に出会ってしまいました。

兔みたいな長い耳に、西洋の悪魔みたいな尻尾から、単純に「兔悪魔」と呼ばれています。

男の子はすぐに走って逃げますが、それよりも早く兔悪魔の尻尾が迫ってきました。





ぶいすっ♡  
ぢゅん♡

もい♡

「ああっ—」

「えへへっ♪ 逃がさないよっ♡」

男の子の足に兎悪魔の尻尾が  
突き刺さり、男の子はその場で  
倒れてしまいました。

「んふふっ♪ それじゃあ、  
いっただっきますっ♡」

「ほらほら♡ お姉ーさんのおまんこに全部出しちゃえ、  
出しちゃえ♡」

「あひいい♡ な、なにゆこれええ♡」

兎悪魔の尻尾には獲物の動きを止める麻痺毒と、  
獲物の体内を気持ち良く溶かしてしまう消化液のブレンドです。  
初めての性交の快楽も合わさって男の子は  
すぐに兎悪魔のおまんこにびゆるびゆる中出ししてしまいます。





「ほら♡ ほら♡ ほら♡ とつても気持ち良いでしょ♡  
このままお姉さんが坊やを搾り殺しちゃうんだから♡」

「や…、やめ…、やめ…!!!」

兎悪魔は容赦なく腰を打ち付けます。

兎の妖女でもある為に性欲が強く、貪欲で、  
獲物が絶頂しても構わずに搾り取ろうとするのです。



「あは♡ すっかり縮んじやったね坊や♡  
じゃあこれから坊やおまんこで食べ殺しちやいます♡」  
「あ、あぁ〜！ や、やめてえええ〜!!!」

搾られ尽くされた男の子は、  
もう見る影もなく縮んでしまいました。  
ですがそれでも食欲な兎悪魔は男の子を放しません。  
おまんこに啜えられた男の子は、  
どんどん奥へと引き込まれて、そして…。





「あ、っ!!」

「ん…♡ は…♡ おまんこでえ…♡ 坊やを食べちゃった  
それじゃあ消化しちやいます♡  
くちゅ♡くちゅ♡」

「あああああああああっ!!!」

男の子は兎悪魔のおまんこに飲み込まれてしまいました。  
おまんこにも消化液が分泌され、  
膣内の柔肉にもみくちゃにされた男の子は  
そのあまりの気持ち良さに悲鳴をあげながら溶けていきます。



「ん…ふふふ♡ 美味しかった♡ ありがとうね♡ 坊や♡  
お姉さん最後の坊やの悲鳴でえ…、感じちゃった♡」

「…」  
哀れ男の子は兎悪魔のおまんこで溶かされて死んでしまいました。  
搾り尽されて、おまんこに丸呑みにされて、膣内の柔肉に包まれて、  
絶頂しながら溶けて死んでしまったのです。

END